

郷土かみのかわの歴史・文化財

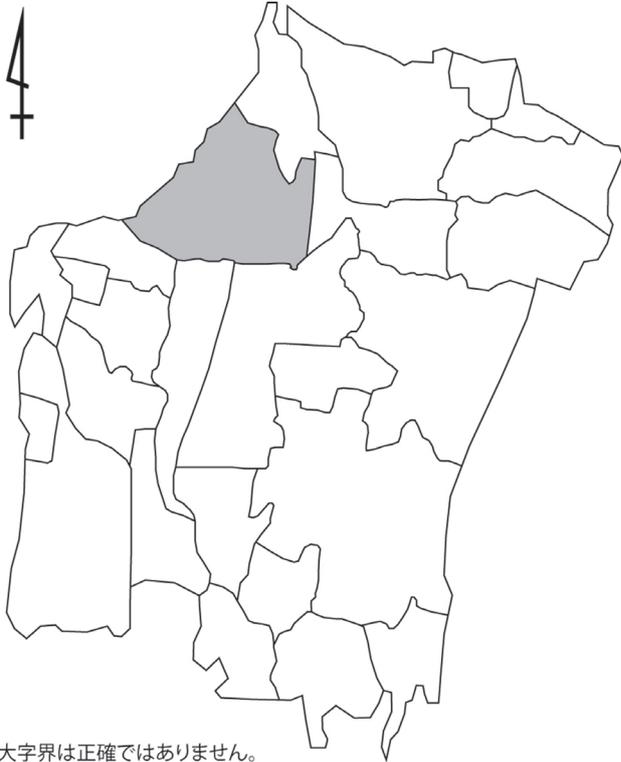
上三川の地域と歴史 石田

石田は、町の北西部に位置

し、その大部分が新4号国道より西側に広がる農村地域です。田川左岸の低地と台地に位置し、地区の西側を田川、中央を赤沢川、東側を無名瀬川が南流しています。現在、すぐ北側にはインターパーク宇都宮南があり、宇都宮市との境に沿って北関東自動車道

が通っています。

天正年間(1830)1844の文書に、「宇都宮下郷上三川境石田感応寺」との記述があります。天保年間(1830)1844の家数は、近隣の村々よりも多い31戸です。徳川家の日光社参の際には、雀宮宿の助郷役を勤めました。江戸時代の初め



※大字界は正確ではありません。

から宇都宮藩領で、その後は一部が幕府領となり幕末を迎えます。

さて、先述の感応寺は字石田前にあります。天台宗の寺院で永享2年(1430)に円海が開山したといわれ、本尊の阿弥陀如来は行基の作と伝えられます。かつては隆盛を極めていたこともあったようですが、天正13年(1585)の争乱によって失われ、その後再建されました。感応寺の東側には、戦国時代に東西約150m、南北約110mの石田館と呼ばれるこの地の土豪の居館があったといわれます。二重の土塁と三重の堀が巡らされ、自然の地形も相まって堅牢な館であったことでしょう。

地区の鎮守である石田神社は、石田コミュニティセンターの北西側に鎮座しています。創建年代は不明で、元々は高麗神社と称していました。明治時代以降に現在の名称へ変更されました。毎年11月の祭礼では、太々神樂が奉納されています。

この太々神樂は、江戸時代

から続く神社に奉納する舞のひとつです。『古事記』などの神話に基づき、五穀豊穡への感謝の祈りを込めた演目が舞われます。上三川町の太々神樂は、「猿田彦命の舞」「住吉大神の舞」「春日大神の舞」「弓の連の舞」「宇須女命の舞」「手力男命の舞」「天照大神の舞」「八幡大神の舞」「稲荷大神の舞」「事代主命の舞」「大国主命の舞」「須佐能男命の舞」の12

の舞によって構成されています。娯楽の少なかった時代、祭りの日に神社を参拝する人々の楽しみのひとつでした。現在は、町内の太々神樂保存会の方々によって伝承されています。石田神社の他、白鷲神社や上郷神社の祭礼においても、この太々神樂が奉納されています。歴史に思いを馳せながら、静かな農村を訪ねてみてはいかがでしょう。



石田神社の太々神樂の奉納 (写真は「手力男命の舞」)